

『日本聖仏教史の研究』

—浄土教への関与を中心として—

伊藤 唯 真

一

日本仏教の展開は、従来、高僧の著作や伝記によって跡づけられる傾向にあったが、名僧知識の仏教はいわば日本仏教の表層にしかすぎないのであって、日本仏教の研究にはこの「表層仏教」に対する「基層仏教」をこそ明かす必要がある。基層仏教を領導したのは高僧知識ではなく、名もなく著作もなく庶民のなかに埋没していった無数の庶民教化者である。これらの庶民教化者は、日本仏教史の各時代にみられる名称でいえば、聖(ひじり)とよばれた教化者である。この聖こそ、民族の伝統に根ざした「日本仏教」の形成者であり、聖の仏教こそ、日本仏教の「基層仏教」をなすものであった。

本論文は、この聖とその仏教を取上げ、聖の本質的性格と聖仏教の原質をさぐりつつ、とくに宗派仏教の原質をさぐりつつ、宗派仏教と聖仏教の交流過程を明かし、宗派仏教、正統教団仏教の基底に「聖仏教」なる基層領域が存在することを明かそうとしたものである。聖および聖仏教に関する研究は決して

皆無ではなく、今までに仏教史、民俗宗教、日本史の領域で徐々に研究が進められてきた。しかし従来の諸領域での研究成果を踏まえ、かつ聖仏教の史的展開を通観して、これを体系的に研究しようとする試みはまだなされていない。本論文では、「日本仏教」における聖仏教の意義を積極的に評価するため、聖および聖の宗教を体系的に追究しようとする努力をしている。

二

日本仏教の基層をなす聖仏教は、司霊の民間教化者によって領導され、滅罪と追善とを宗教的基調とした祈祷と葬祭仏教として顕現する。そして宗派仏教の形成にもいろんな形で関与している。このような聖仏教について、本論文では課題を、(A)基層仏教領導者たる聖の形態、性格、宗教、系譜などに関する問題、(B)聖の葬祭仏教への関与の問題、(C)聖の基層仏教と高僧の表層仏教との関係についての問題、以上三点に絞り、この三課題に即して論述を展開している。

即ち、如上の課題(A)を解明せんとしたのがⅠ第一部 民間教化僧と浄土教の進展Ⅱであり、(B)の課題を考究したのがⅡ第三部 浄土系聖による開寺と葬祭Ⅲであり、(C)の課題を考察したのがⅡ第二部 開創期浄土宗と念仏聖Ⅳである。しかしして第一部では聖系譜論、第二部では浄土宗聖教団論、第三部では聖葬祭史論が述べられている。

第一部は、民間教化者の系譜の浄土系念仏聖が関与して進展

する初期浄土教を取扱った「第一篇 民間教化僧の系譜とその宗教」「第二篇 初期浄土教の形成と聖」の二篇から成っている。第一篇は特に基層仏教を拓いた民間教化僧の、古代から中世に至る系譜、宗教形態ならびにその基本的属性を探ったもので、第一章では自度僧の半僧半俗の民間教化者の類型と特性を述べ、第二章では菩薩号をもった私度僧的教化者を中心に、民衆的基盤に立脚して官寺仏教と対立的立場にあった菩薩僧仏教が奈良時代に形成されたことを論じ、第三・第四章では平安時代中期以降に鎌倉時代にかけて輩出した阿弥陀聖と阿弥陀仏号を冠称する民間教化僧を取上げ、特に彼らによって形成されていく民間浄土教の様相を窺った。また第二篇では第一章において、教団仏教から離脱した遁世聖が、それ以前に民間で形成されていた聖仏教の中へ流入し、聖仏教に浄土教的境域を現出させたことを明かし、第二章では聖の民間教化の具体相を探り、第三章では、十世紀以降貴族社会の変動につれ一段と民衆の世界が進展したなかで、聖仏教も社会的なひろがりをもち、特に下層民社会に伸張した様子を賤民的聖宗教者を通して考察した。

第二部は、聖仏教研究の立場から法然の浄土宗教団に照射を与えたもので、聖仏教が教団仏教を形成する様態を探り、教団仏教と聖仏教の両者が融合したことを実証している。この部は、法然の宗教とその教団が聖仏教と関連をもって存立していたことを明かした「第三篇 法然の立宗と念仏聖の教団」と、

法然滅後の浄土宗教団が聖教団として展開したことをみた「第四篇、法然滅後の念仏教団の様相」と、この聖教団のなかで生成した種々の念仏聖像を通して、初期法然教団の性格を究明した「第五篇 念仏聖像成立の教団背景」との三篇から成っている。法然が聖を志向し、聖仏教のなかに身を置いて、多くの聖を収攬して、聖仏教を浄土宗なる教団仏教へと昇華させ、日本仏教の山脈のなかの一大山系をつくり出したことは、聖仏教の展開史上きわめて重要である。開創期の浄土宗は聖の同法教団であった。聖を迎え入れ、また析出する母体教団であった点に浄土宗の聖仏教史からみたる史的意義がある。第二部は開創期浄土宗の教団論としての性格が濃いのが、その多くは聖教団であったことを明かすことに費されている。特に第三篇の第四章では念仏聖教団の構造を論じ、第四篇の第一、第三章では教団の構成員である念仏勸進聖や念仏衆の生態を考察し、第五篇の第一、第二、第三章では著名念仏聖の行実と無名の聖が想念する理念的聖像のはざまで創られた聖像を窺っている。

第三部は、聖仏教が寺院の開創を介して宗派仏教と関与をもち、一方では葬祭を通じて宗派仏教はもとより、それを越えた基層の所で葬祭仏教を展開させていることを明かしたもので、「第六篇 融通念仏聖と社頭聖」「第七篇 民間寺院(浄土宗)と念仏聖」「第八篇 葬祭仏教のなかの聖」の三篇から成る。第六篇の第一章では融通念仏聖が融通念仏と納骨方式による惣塔の造立を中心に寺院造営を行なったさまを室町期の浄土宗寺

院の一事例で窺い、第二章では同じく室町期の村落神社のなかの社頭聖の活動とその経済基盤を追究している。第七篇は聖仏教と宗派仏教の交叉を、中・近世の交から近世末期までの浄土宗において考察したものである。第一章では一般寺院の成立に念仏聖が関与していることを近江の場合で窺い、第二章では廻国の聖が中世末・近世初頭の間に村落に定着し、寺院を開創して宗派仏教のなかへ沈潜していく過程を浄土宗寺院の開創伝承から探り、第三章では近世の浄土宗に聖仏教の伝統をもつ捨世聖が現われ、形骸化した宗派仏教に活力を与えたことを論じている。第八篇は、聖が葬祭仏教を担っていたことを、特に中近世においてみた四章から成っている。第一章では南北朝時代の上官層一貴族の宗教生活を窺い、その葬祭展墓の慣行とこれに関与している念仏聖に注目し、寺、墓、僧尼の緊密な構造関係や祖先祭祀の諸相を考察、第二章では祖先祭祀と密接に絡んでいる無縁仏の祭祀を取上げ、無縁霊の祭碑をめぐる念仏聖的な民間宗教者の活躍があったらしいことを推論した。また第三章・第四章は葬送と追善を主務とする三昧聖を取扱ったものである。第三章では特に『行基菩薩草創記』なる行基の墓地開創を述べた書物が道頓堀の三昧聖の著作であることを明かし、そこに記載された三昧聖の伝承を論じ、第四章では論者所蔵の新材料によって、行基系三昧聖の由緒と、大和一国の行基系三昧の分布と三昧聖の存在形態をみ、両章あわせて、中世の念仏聖の一部が近世では三昧聖となって残留するが、彼らは聖仏教に

顕著な葬祭の面を真正面から担うものであったことを明かしている。

三

以上のように、聖仏教の展開を三部八篇二十六章にわたって論述しているが、これから以下のように総括できる。

課題の(A)は聖なる教化者の系譜、性格等についてであったが、次のように要約できる。聖仏教を形成し、衆庶に滅罪・追善の宗教を教化し、司霊者として葬祭に深く関係した教化者の原像は、仏教史上では奈良時代に成立した。半僧半俗的な沙弥・優婆塞や禪師・菩薩などに認めることができる。奈良時代以降わが国の基層仏教の発達に寄与した教化者は、各時代とも大体沙弥、優婆塞的な宗教形態を伝統的にもったものによって占められていた。平安時代の聖・聖(上)人にしても、阿弥陀聖や阿弥陀号所有者など、いずれも沙弥・優婆塞的な性格を濃厚に保持し、民衆の世界と密着していた。この沙弥・優婆塞的な半僧半俗性が聖の基本的性格であり、これを帯びる宗教者の間に自づと一つの系譜が成立していた。

また課題の(C)に関連するが、聖仏教と宗派仏教との関係も聖仏教論での重要な論点であった。これについては次のように云える。奈良時代に沙彌・優婆塞が得度を公許されることによって聖仏教が教団内へ流入し、教団側からいえば聖仏教を吸引するという現象があった。平安時代になると教団からの離脱者が

聖の世界に身を投じ、聖仏敎はそのことよって著しく教學性をもつことになった。つまり浄土敎念仏系聖が輩出し、聖仏敎のなかに浄土敎が進展したのである。そして法然が浄土宗を開創するや、念仏系聖がその許に集まり、敎団が形成され、新しい宗派仏敎が成立した。しかしこの宗派仏敎は実は聖集團であった。中世初期に聖仏敎の高揚現象が現われのである、中世の浄土敎系諸宗は、ある意味ではみな聖敎団であった。中世仏敎は聖の世紀を迎えた。従って中世で宗派仏敎と聖仏敎とは際立って混融していた。極論すれば聖仏敎が即宗派仏敎であった。中世末期から近世初頭にかけて、廻国遊行の聖が寺院を開創し、そこへ定着するようになると、多数の寺院を擁した宗團が出現した。即ち近世敎団の誕生である。死霊の鎮魂と追善を管掌していた念仏系聖がつくった寺院群の多くは浄土宗寺院化した。江戸時代には浄土宗寺院も宗敎性をしだいに失って世俗性を増すが、このようなときに現われたのが聖的な伝統をもった捨世聖である。捨世派の出現は、地下水の如く伏流していた聖仏敎へ噴出したことを意味している。

聖仏敎論での今一つの主題は(B)の課題たる葬祭仏敎である。聖は語義からしても靈魂の鎮送・祭祀を司どるものであったから、その宗敎が葬祭仏敎となるのは当然である。聖仏敎の本領の一つは確かに葬祭であった。浄土敎は魂の家郷を教えた。念仏聖はその家郷を人々示しつつ、臨終の善知識となり、葬祭への関与を始めた。念仏聖が葬祭と不可分の關係にあるのは、念

仏聖が司靈者であったが故である。かくて念仏聖と墓と寺とが葬祭を契機に密着していく傾向が室町時代には生じていた。近世になって民間で葬祭、特に葬送を担ったのが三昧聖であるが、彼らのなかに行基が墓地を開創したとの伝承をもつものがあり、その墓地には寺号がつけられ、正統仏敎的扮飾が見られた。

以上が(A)(B)(C)の三課題を解明しての要約であるが、さらにこれから聖仏敎は半僧半俗的な宗敎者によって形成され、現世安穩、後生善処の現当の利益を願う人々に滅罪と追善、祈願と葬祭の仏敎を提示し、時代、地域、階層等を越えて普遍・恒常の仏敎として、——つまり日本仏敎の「基層仏敎」として展開していた、と結語することができる。

なお、本論文の細目は次の通りである。

序論 聖仏敎研究の課題と方法

一 聖仏敎の概念規定

二 研究略史と問題の所在

三 本論文の構成と研究視角

第一部 民間敎化僧と浄土敎の進展

第一篇 民間敎化僧の系譜とその宗敎

第一章 民間敎化僧の形態と性格

第一節 律令仏敎下の自度僧

第二節 民間敎化僧の類型

第三節 民間教化僧の基本的性格

第二章 菩薩僧の出現

第一節 菩薩僧と慈氏僧

第二節 菩薩僧出現の社会的背景

第三節 菩薩僧の形態と性格

第四節 菩薩僧の史的位相

第三章 阿弥陀の聖とその消長

第一節 阿弥陀聖空也とその念仏の性格

第二節 空也の継承者と庶民の阿弥陀聖観

第三節 阿弥陀聖の盛衰

第四章 阿弥陀仏号所有者の析出

第一節 阿弥陀仏号の創始

第二節 阿弥陀仏僧の性格

第三節 阿弥陀仏号者の種類

第四節 阿弥陀仏号使用の精神的素地と冠称者の社会的階層

第二篇 初期浄土教の形成と聖

第一章 通世聖の浄土教的世界

第一節 通世聖とその宗教特性

第二節 浄土教家志向の「八聖」像

第二章 聖の庶民教化

—講を中心として—

第一節 信仰的講集団の成立

第二節 浄土教系講会の種類と展開

第三節 聖と民衆的寺院と講

第四節 聖と貴族との師檀関係

第三章 浄土教と賤民的宗教者

第一節 浄土教の受容層

第二節 卑賤者と願生心

第三節 法師形卑賤者と浄土教

第四節 専修念仏宗成立の賤民的契機

第五節 浄土教義のなかの卑賤者

第二部 開創期浄土宗と念仏聖

第三篇 法然の立宗と念仏聖の教団

第一章 法然の回心と「浄土宗」開立

—承安前後—

第一節 『往生要集』の受容

第二節 善導への帰向

第三節 念仏専称者への関心

第四節 宗名「浄土宗」の成立

—第一次思想成熟—

第二章 遊蓮房円照と法然の下山

—聖的世界への接近—

第一節 円照研究の意義と円照伝

第二節 円照の宗教

第三節 法然の宗教的志向と下山問題の新視点

第四節 円照・法然をめぐる人物譜

第三章 法然の思想進展と教団の生成

第一節 選択本願念仏説の成立

—第二次思想成熟—

第二節 法然同法集團の出現

—主治・建久期—

第三節 法然の三昧発得

第四章 念仏聖教団の性格と形態

第一節 「専修」「念仏宗」とその興隆期

第二節 念仏宗の形態とその領導者

—建久・建永期—

第三節 念仏上人の「偏執之勸進」

第四篇 法然滅後の念仏聖教団の様相

第一章 勢観房源智の勸進と念仏衆

—玉桂寺阿弥陀仏像胎内文書からみたる—

第一節 勸進聖としての源智

第二節 源智の阿弥陀仏像造立願文

第三節 勸進の念仏上人と念仏衆

第二章 念仏聖の活躍と社会的基盤

第一節 念仏教団の多党化

第二節 専修念仏の社会的基盤

第三節 一向専修の反体制的行為

—謗法・破戒・神祇不拜—

第三章 貴族と能声の念仏聖

—平経高を例として—

第一節 開創期浄土宗研究と『平戸記』

第二節 平経高の浄土信仰

第三節 恒例念仏衆の性格

第四節 恒例念仏衆の教団的背景

第五節 能声之輩

—その念仏教団における意義—

第五篇 念仏聖像成立の教団背景

第一章 『知恩講私記』の法然像

第一節 専修念仏の興隆と法然伝

第二節 『知恩講私記』の成立と作者

第三節 「諸宗通達」「決定往生」の祖徳

第四節 「本願興行」「専修正行」の祖徳

第五節 『知恩講私記』の法然諸伝中の位置とその教団的背景

第二章 法然伝に現われた聖覚像の成立過程

第一節 法然伝に現われた聖覚

第二節 聖覚の法然治病譚成立の背景

第三節 嵯峨念仏房・法然・九条兼実と聖覚

第四節 聖覚像の形成と唱導聖

第三章 明遍の行実と伝記

第一節 明遍研究の意義

第二節 敏覚と明遍について

第三節 明遍の高野山管居

第四節 東大寺僧形八幡神像胎内銘をめぐる

第五節 法然伝に現われた明遍

第三部 浄土系聖による開寺と葬祭

第六篇 融通念仏聖と社頭聖

第一章 寺院造営と融通念仏勧進

——越前西福寺を中心として見たる——

第一節 中世の融通念仏

第二節 西福寺造営と融通念仏

第三節 融通念仏聖としての良如

第四節 氣比神宮・常宮神社と融通念仏

第五節 融通念仏の浄土宗への影響

第二章 村落神社の堂庵と社頭聖

——近江の神社史料による——

第一節 社頭聖の呼称例

第二節 社頭聖の宗教的行業

第三節 堂庵・社頭聖の経済基盤

第四節 社頭聖の近世での残留形態

第七篇 民間寺院(浄土宗)と念仏聖

第一章 一般寺院の成立事情——近江の場合——

——開創者と寺院形態をめぐる——

第一節 群小無名寺院の開創史料

第二節 近江浄土宗教団の生成期

第三節 生成期における諸問題

第四節 近江教団の本末圏

第五節 近江教団発展の一特質

第二章 開創伝承より見たる念仏聖の定着

第一節 『旧詞』の廻国念仏聖伝承

第二節 廻国念仏聖の寺堂止住

第三節 廻国念仏聖としての開山の称号

第四節 寺堂の本尊と廻国念仏聖

第五節 民間念仏の機能と念仏聖

第六節 廻国修行の浄土宗僧

第七節 廻国念仏聖の分化転身と寺院造営

第三章 「捨世」の念仏者

——遁世聖の伝統——

第一節 世を思い捨てたる聖

第二節 近世での捨世の意味

第三節 捨世念仏聖の宗教生活

第四節 捨世聖の隠遁性と社会性

第五節 「捨世」僧の宗史上の意義

第八篇 葬祭仏教のなかの聖

第一章 中世葬祭仏教——墓・寺・僧の相互関係

——『師守記』を通して見たる——

第一節 『師守記』葬祭記事分析の視点

第二節 中陰記事と墳墓立塔をめぐって

—故中原師右・同妻室の場合—

第三節 形代つき三尊絵像による祭祀と半檀家制の先

行形態

第四節 祭祀対象靈の族的範圍と単墓による複数靈祭

祀の出現

第五節 葬祭仏教—その寺堂・墓地・僧尼の構造關

係

第二章 法界V靈の祭碑と民間宗教者

第一節 ホウカイ—無縁靈の中世的表現

第二節 法界靈とその塔碑の原初形態

第三節 講衆による法界塔碑の出現

第四節 法界塔碑の機能と中世墓制への関与

第三章 行基墓地開創の伝承

—『行基菩薩草創記』めぐって—

第一節 『行基菩薩草創記』と道頓堀墓所聖

第二節 『行基菩薩草創記』の三昧關係伝承

第三節 道頓堀墓所聖の三昧關係資料

第四節 三昧開創・志阿弥伝承の形成期

第四章 行基系三昧聖の由緒とその墓寺

第一節 新出史料による行基三昧聖の由緒

第二節 行基系三昧寺院と墓郷

結論 聖仏教論と「日本仏教」研究

氏名(本籍) 伊藤 唯真(滋賀県)

学位の種類 文学博士

学位記番号 乙第六号

学位授与の月日 昭和五十六年十月二十三日

学位授与の要件 学位規則第五条第二項該当者

学位論文題目 日本聖仏教史の研究

—浄土教への関与を中心として—

論文審査委員

主査 教授 柴田 實
副査 教授 水野 恭一郎
副査 教授 藤堂 恭俊